

茨城県行方郡麻生町

赤松遺跡発掘調査報告書

1993年

麻生町教育委員会
麻生町赤松遺跡発掘調査会

序

麻生町は、自然環境に恵まれ、「水と緑豊かな田園都市」として発展してきました。

21世紀の到来を目前に控え、当町は大きな変動を迎えようとしています。「首都圏のオアシス」を目指した諸々の施策が展開中で、町の暮らしを大きく飛躍させるものと期待されています。

このような中で遠く祖先が残してくれた豊かな歴史と文化遺産は、社会的変遷、人々の持つ価値観や文化意識の多様化等により失われつつあるのが現状です。とくに多くの埋蔵文化財を有する麻生町にとって、先人達の足跡や偉業を明らかにして、郷土の伝統ある歴史を後世に伝えていくことは、今に生きる私達の使命であり、麻生町の文化の発展のためにも極めて大切なことと思います。

この度、麻生町大字麻生字赤松1569-2を中心として砂利採取が計画されました。文化財保護の立場から遺跡保存を前提として協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることの理由により、止むなく発掘調査をして記録保存することになりました。

本調査を実施するにあたり、茨城県教育委員会、鹿行教育事務所の先生方の御指導のもとに、日本考古学研究所・藤原均氏を調査主任に、汀安衛氏・小川和博氏を調査員として、「赤松遺跡発掘調査団」を発足させ、地元の方々の協力を得て、無事発掘調査を完了することができました。これもひとえに調査主任の藤原先生をはじめ関係各位の御指導、御協力の賜と深謝申し上げます。

さらに文化財保護に対し深い御理解のもと、発掘調査に係る一切の経費を御負担いただきました有限会社茂木建材代表取締役茂木宗五郎氏に対して、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、この報告書がひとりでも多くの方の目に触れ、郷土を知る上に役立つことを御期待申し上げます。

1993年3月

赤松遺跡発掘調査会

会長 根本宗一

(麻生町教育長)

例 言

1. 本書は、茨城県行方郡麻生町大字麻生字赤松1569-2番地外に所在する赤松（あかまつ）遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、砂利採取工事に伴う事前調査として、茨城県教育庁文化課・茨城県鹿行教育事務所の指導のもとに、茂木建材有限会社との委託契約に基づいて、赤松遺跡発掘調査会（会長 根本宗一麻生町教育委員会教育長）が実施した。
3. 調査期間は、平成4年8月3日から同年8月11日まで発掘調査を実施し、同年8月20日から整理作業を実施した。
4. 赤松遺跡調査会組織は下記のとおりである。

会 長	根本 宗一	麻生町教育委員会教育長
副会長	平輪 一郎	麻生町文化財保護審議会会長
理 事	森崎 謙一	麻生町文化財保護審議会副会長
理 事	植田 敏雄	麻生町文化財保護審議会専門調査員
理 事	藤原 均	日本考古学研究所調査室係長
理 事	汀 安衛	鹿行文化研究所調査主任
理 事	茂木 敏	麻生町教育委員会事務局長
監 事	茂木 千枝	㈱茂木建材
監 事	谷田 泰章	麻生町出納室長
幹 事	宮本 正	麻生町教育委員会社会教育係長
幹 事	樋口 和夫	麻生町教育委員会社会教育主幹
5. 赤松遺跡発掘調査団は下記のとおりである。

団 長	根本 宗一	麻生町教育委員会教育長
副団長	茂木 敏	麻生町教育委員会事務局長
調査主任	藤原 均	日本考古学研究所調査室係長
調査員	汀 安衛	鹿行文化研究所調査主任
調査員	小川 和博	日本考古学研究所・日本考古学協会員
補助調査員	宮本 正	麻生町教育委員会社会教育係長
補助調査員	樋口 和夫	麻生町教育委員会社会教育主幹
補助調査員	瀬尾 浩	麻生町教育委員会社会教育指導員
補助調査員	大川 隆弘	麻生町教育委員会社会教育指導員
事務局		麻生町教育委員会
調査作業員	鈴木一美 高寺吉右衛門 男庭留吉 小沼智恵 宮本和美 小沢芳夫 青木清二 藤崎利男 茂木雅人	
6. 本書で使用した地図は、麻生町発行の1:2,500と国土地理院発行の1:25,000（麻生）を使用した。
7. 本書の原稿執筆は、汀安衛の指導のもと、小川和博が行い、トレースは徳生さち子（日本考古学研究所）が行なった。
8. 発掘調査から報告書刊行に至るまで茨城県教育委員会をはじめ、茨城県教育財団、㈱茂木建材等の諸機関から多大なご助言とご協力を得ました。記して謝意を表する次第です。

目 次

序

例 言

第I章 序 言

1. 調査にいたる経過	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査の概要	4
4. 調査日誌	4

第II章 遺構と遺物

1. 土坑	6
2. 土器	11
A. 縄文土器	11
B. 土師器・須恵器	11

第III章 まとめ—赤松遺跡のセルトメント・パターン

まとめ—赤松遺跡のセルトメント・パターン	12
----------------------	----

図 版 目 次

PL 1 遺跡遠景 (南より)	PL 5 SK 4・5 全景
遺跡近景 (西より)	SK 4 全景
遺跡近景 (西より)	SK 4 土層
PL 2 調査区全景 (北から)	PL 6 SK 5 全景
調査区全景 (北西から)	SK 7 全景
調査区全景 (西から)	SK 8 全景
PL 3 SK 1 全景	PL 7 調査区南端部
SK 1 土層	調査区南自然埋没谷
SK 1 土層	南自然埋没谷遺物出土状況
PL 4 SK 2・3 全景	PL 8 縄文土器
SK 2・3 全景	縄文土器
SK 2 遺物出土状況	

第I章 序 言

1. 調査にいたる経過

今回行なわれた調査は、大麻古墳群、県道水戸鉢田佐原線の東に位置した新発見の遺跡である。調査にいたる経過については下記の通りである。

- 平成3年4月10日 榑茂木建材さんより埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて照会があった。
- 平成3年4月23日 日本考古学研究所藤原均氏 県文化財保護指導員内野健造氏に確認調査を依頼した結果、遺跡が確認されたが、立木等伐採しないと全体の状況は把握できないとの報告を受けた。
- 平成3年5月22日 榑茂木建材さんへ回答。
- 平成3年6月10日 榑茂木建材さんと文化財保護の立場で協議を行なったが、計画変更は不可能とのことで、やむなく発掘調査を行なうことで確認された。
- 平成3年10月21日～30日 確認調査を行い、本調査実施の為の基礎資料を得た。
- 平成4年7月7日 榑茂木建材さんと本調査実施の協議を行い、平成4年8月3日より同年9月10日までの期間で行なうことに決定した。
- 平成4年7月30日 麻生町教育委員会教育長根本宗一を会長とする赤松遺跡発掘調査会が発足し、さらに日本考古学研究所藤原均を調査主任とする発掘調査団が結成され、平成4年8月3日から同年8月11日の期間で調査が実施された。

(鶴田)

2. 遺跡の位置と環境

赤松遺跡は、茨城県行方郡大字麻生字赤松1569-2番地他に所在し、平成3年の確認調査においてはじめて発見された遺跡である。付近は既に宅地や土砂採取等により大半の台地は消滅しており、しかも瘦尾根状台地とはいえ土器などの遺物のみならず、遺構として土坑も検出されており、明らかに先住民の生活の痕跡を留める遺跡として確認されている。

遺跡は、麻生町の南端に位置する。ここは標高30～40m前後の行方台地がひろがり西側の霞が浦に向かっていくつもの舌状台地を派生させている。その一つで城下川と夜越川に挟まれた麻生支台のほぼ中央部にははる支脈で、通称大麻支台の先端部にあたる。

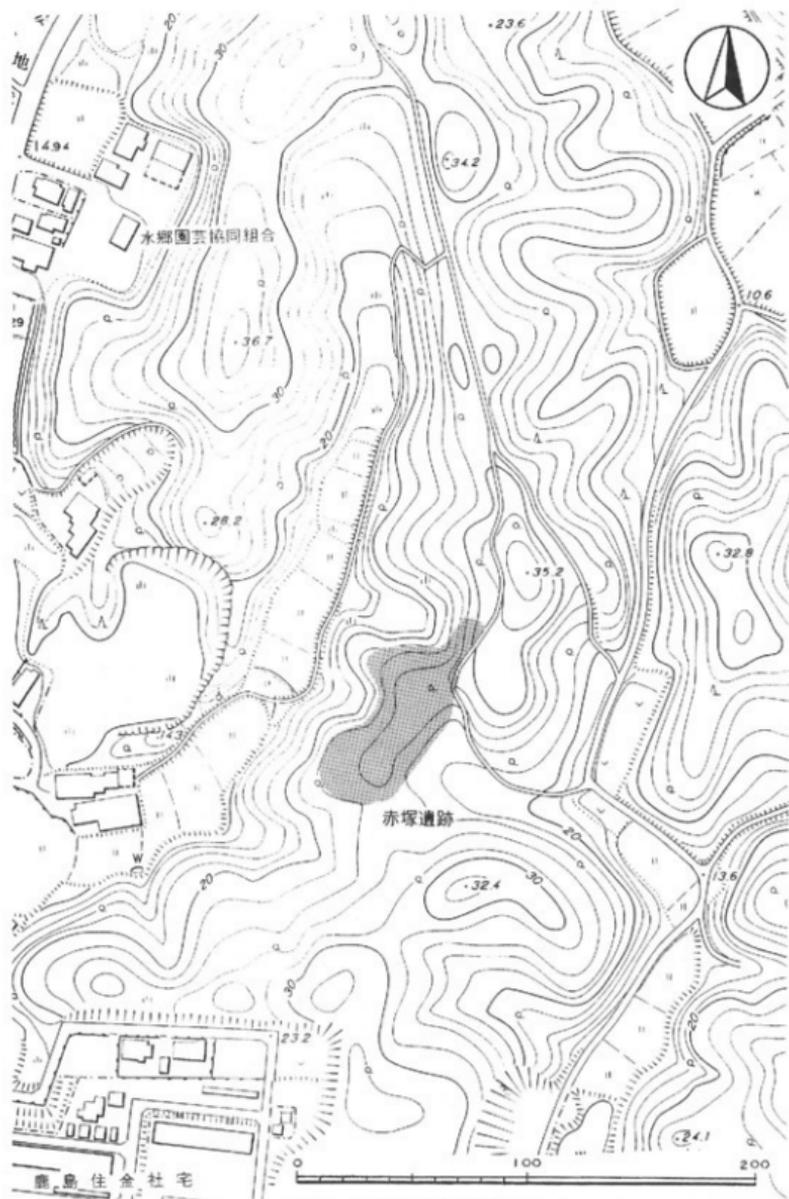
遺跡となっている部分は、標高26mを頂部として西側斜面を含む一帯で、ほとんど平坦面が確認できないほど瘦尾根状台地である。この斜面部の勾配はきつく、急激に水田である沖積地に落ちている。この比高差は約15m前後である。この尾根状態はさらに北側に延びていくに従ってより狭くなり、平坦面がまったくなくなる。反対に南側は既に削平されているが、平坦面の広がりや確認でき、本来の集落跡は南寄りに存在したことを示唆している。



第1図 遺跡位置図 (1.赤塚遺跡, 2.大麻貝塚, 3.麻生城跡) (1/25,000)

周辺遺跡の状況として、本遺跡の700m真北の至近距離にある大麻貝塚が位置する。ここは道路拡幅工事により平成元年に一部発掘調査が実施され、住居跡と土坑が検出されている。調査の結果、縄文時代後期称名寺・堀之内・加曾利B・安行I式期の主軸貝塚である。本遺跡でも後期の遺物が出土しており、いうまでもなく両遺跡の関係は、大麻貝塚の拠点集落に対する赤松遺跡はキャンプ・サイトとしての周辺の集落である。(小川)

- * 池上啓介1931「常陸國麻生大宮台貝塚調査報告」『史前学雑誌』3-4
- * 汀 安衛1990「大麻貝塚発掘調査報告書」大麻貝塚発掘調査会
- * 藤原 均1991「二本木城跡調査報告書」二本木城跡調査会
- * 茂木雅博他1992「於下貝塚発掘調査報告書」麻生町教育委員会



第2図 赤塚遺跡周辺地形図 (1/2,500)

3. 調査の概要

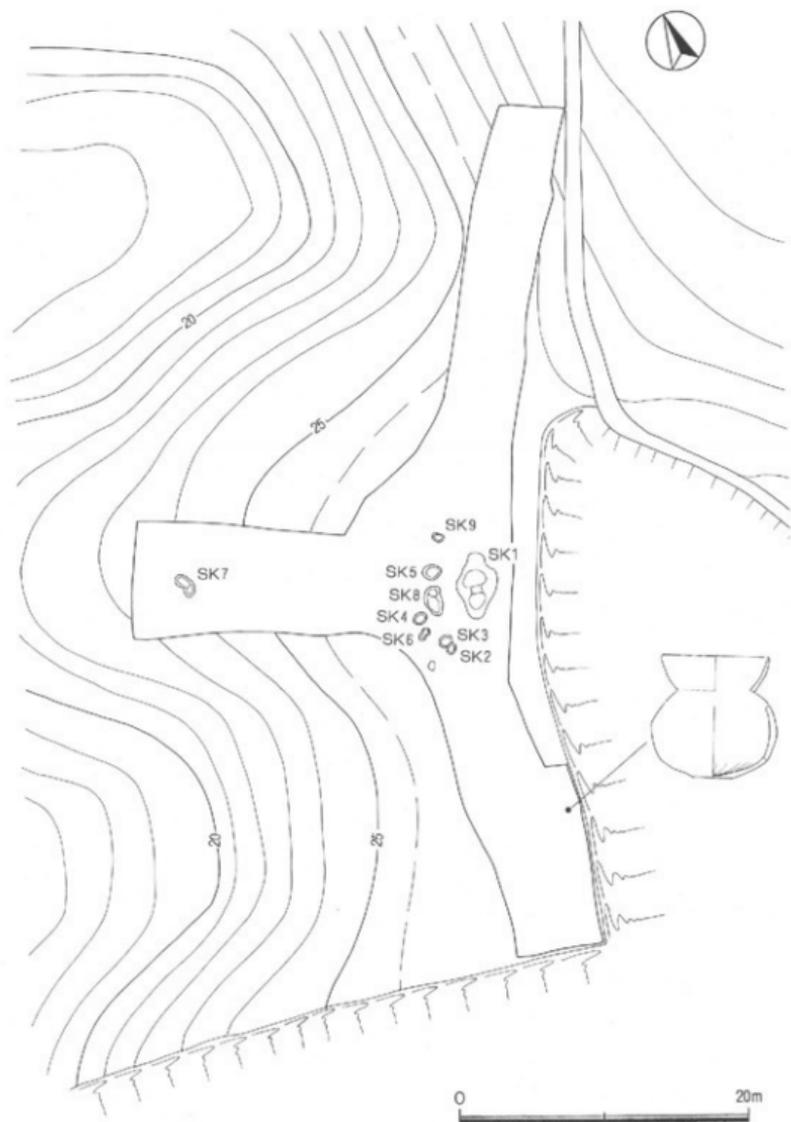
調査は、土砂採取事業に伴うもので、事業者の申請に基づき申請地のとくに台地上面を中心に平成3年11月確認調査を実施した。その結果ほぼ全面にわたって遺構の落ち込みと思われる黒色土が覆っていることが判明した。そこで台地上面は全面本調査の範囲として確定し、発掘調査することとした。

本調査は、平成4年8月3日より開始した。なお工事の関係からすでに表土層の削平は完了しており、したがって南側から遺構検出のための床土除去に取りかかり、北方へ進んでいくこととした。床土は薄く5～20cmを測るのみでローム層に達する。しかもソフトロームは削平され、ハードローム面あるいは斜面の一部では常総層である砂層が露呈していた。

調査の結果、土坑9基が検出され、うち3基は屋外炉址と思われる。またこれらの中で明らかに縄文時代に帰属するものはわずか2基で、その内訳は縄文前期中葉1基、晩期前半1基である。その他残り6基の時期は不詳であるが、土坑の形状および覆土の状態から判断して大半は縄文時代で誤りないと考える。また遺構は伴わないが、古墳時代および平安時代の土師器・須恵器が出土している。調査は思ったより早く8月11日に終了した。

4. 調査日誌

- | | | | |
|-----|--|------|--|
| 8・3 | 午前中地鎮祭。
午後より床土除去作業を開始する。
土坑を2もしくは3基検出する。 | 8・7 | 3～6号土坑の土層実測終了後、全面調査し、平面実測を行なう。
1・2・7号土坑も平面実測を行ない同時に断面図の作成を行なう。 |
| 8・4 | 午前床土の除去作業の継続。土坑を6基確認する。
午後土坑の調査を開始する。1～6号土坑（SR01～06）と呼称し、土層観察のため、覆土の半分を調査し、1・2号土坑の土層実測を行なう。 | 8・8 | 8・9号土坑を検出し、発掘を行ない当範囲内で検出された遺構すべての調査を完了させる。
遺構調査終了後、全体測量を実施し、各遺構の断面図を作成する。 |
| 8・5 | 南東部で検出された埋没谷状の黒色土層を調査する。ここより古墳時代の土師器（埴形土器）を出土する。また西側突出部で検出された屋外炉址（SK07）の調査を行い、土層実測を実施する。 | 8・11 | 赤松遺跡の発掘調査をすべて終了させ現場のかたづけを行なう。
(汀・小川) |



第3図 遺構配置図 (1/4)

第II章 遺構と遺物

本遺跡は縄文・古墳・平安時代にわたる複合遺跡であるが、検出された遺構・遺物は極端に限定されたもので、遺跡の性格が拠点集落ではなく、キャンプサイト的で一時的な周辺遺跡であることが判明した。したがって遺構としては土坑6基、屋外炉3基だけであり、遺物としては縄文土器、土師器、須恵器の小片がわずかに出土したのみである。

また発掘された土坑と屋外炉址のうち8基は、調査区のほぼ中央部、西側に突出する馬背状台地上に構築され、屋外炉址1基は西側突出部先端に位置する。これらは明らかに縄文土坑と考えてよいものは、出土遺物の関係からわずかに2基で、なかには時期を縄文時代とするには躊躇されるものも含まれるが、ここでは全体の状況判断から一応縄文時代に帰属させ、また屋外炉址も土坑として掘り込まれており、便宜的に土坑として一括して取り扱うこととした。

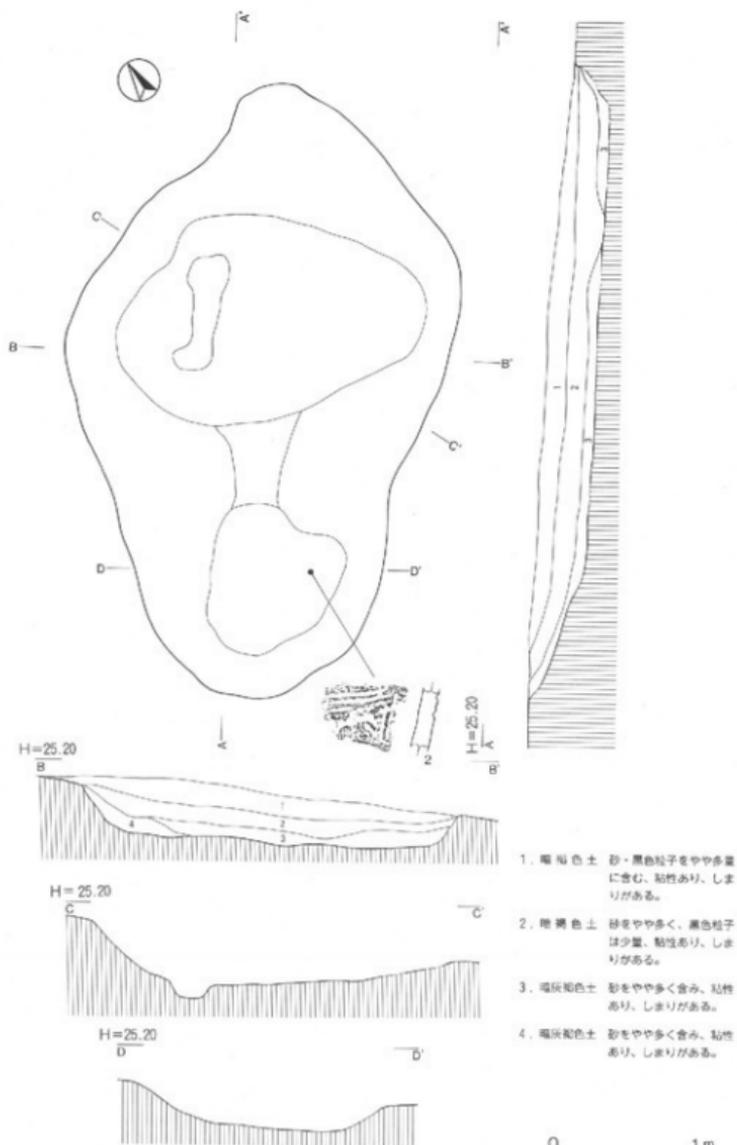
1. 土坑(第4～6図、PL3～6)

1号土坑(SK01) 2基重複の不整形態で、ちょうど瓢箪形を呈している。確認面での上端長軸4.32m、北側短軸2.78m、南側短軸1.69m、下端長軸3.10m、北側短軸2.20m、南側短軸0.93m、深さ0.36mを測り、北側が大きく膨らんでいる。覆土は両土坑とも共通しており第1層暗褐色土(粘性高・粒子中細)、第2層暗褐色土(粘性高・粒子細)、第3層暗灰褐色土(粘性高・粒子中細)、第4層暗灰褐色土(粘性高・粒子粗)となっており、土層から判断しても構築時期はほぼ同時と考える。壁は緩く外傾し、床面は凹凸が目立つ。また北側の土坑には小さな溝状の掘り方が付属するが、用途は不明である。なお、南側土坑覆土中(床面15cm程浮いている)より、縄文前期黒浜式土器1片(2)が出土している。

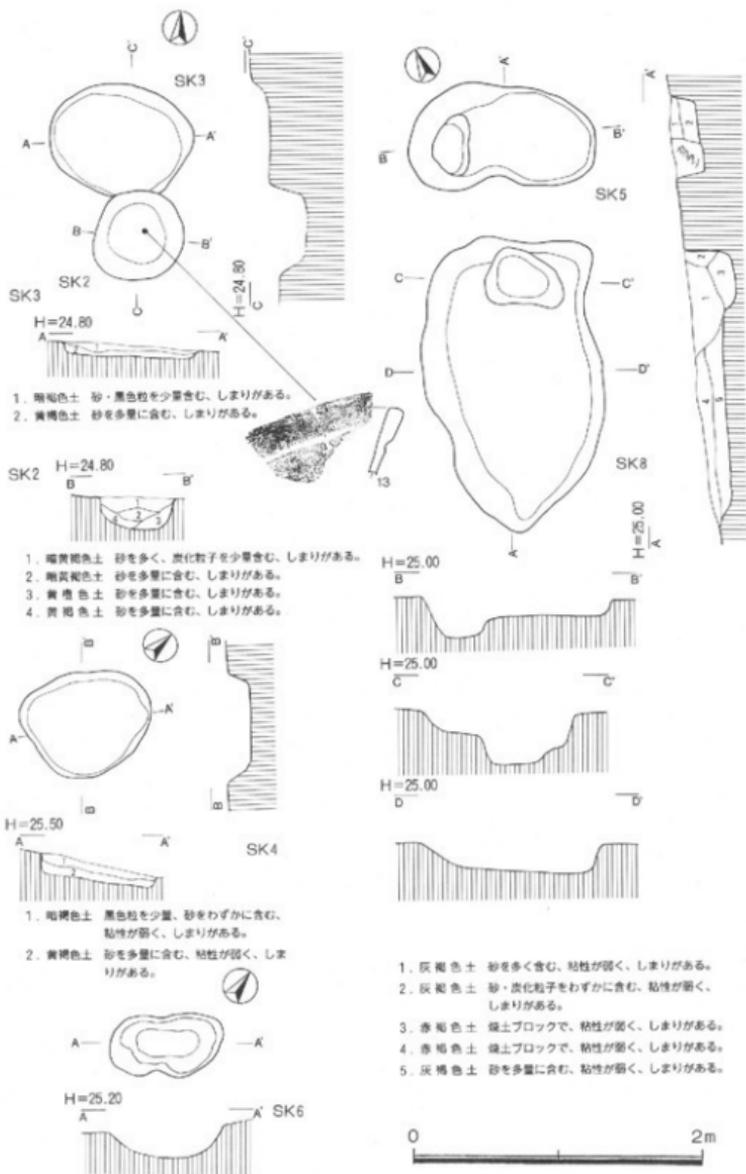
2号土坑(SK02) 1号土坑の南で3号土坑を切って構築されている円形土坑である。確認面での上端長軸0.63m、短軸0.6m、下端長軸0.43m、短軸0.4m、深さ0.2mを測る。覆土は第1層暗黄褐色土(粘性高・粒子中細)、第2層暗黄褐色土(粘性中・粒子細)、第3層暗黄褐色土(粘性高・粒子中細)、第4層黄褐色土(粘性高・粒子細)となっている。壁の立ち上がりはやや外傾し、底面はほぼ平坦である。ここよりほぼ中央部の覆土中(床面より10cmほど浮いている)より縄文晩期前半安行3c式土器(13)が出土していた。

3号土坑(SK03) 2号土坑の北で、同土坑によって切られている楕円形土坑である。確認面での上端長軸1.00m、短軸0.78m、下端長軸0.89m、短軸0.66m、深さ0.11mを測る。覆土は薄く第1層暗褐色土(粘性弱・粒子細)、第2層黄褐色土(粘性高・粒子中細)となっている。壁の立ち上がりは緩く外傾し、床面はほぼ平坦である。遺物の出土はなく、所属時期は不詳である。

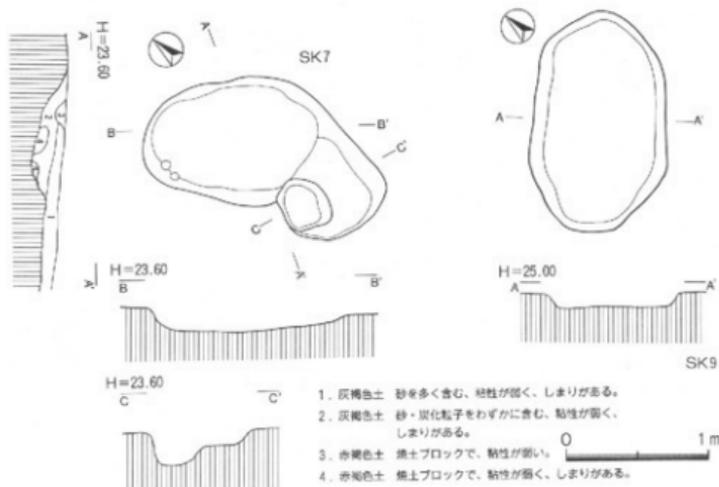
4号土坑(SK04) 1号土坑の西側傾斜面に位置する不整形の土坑である。確認面での上端長軸0.91m、短軸0.76m、下端長軸0.86m、短軸0.65m、深さ0.11mを測る。覆土は第1



第4図 土坑(SK1)実測図(1) (1/4)



第5図 土坑(SK2~6・8)実測図(2) (1/4)



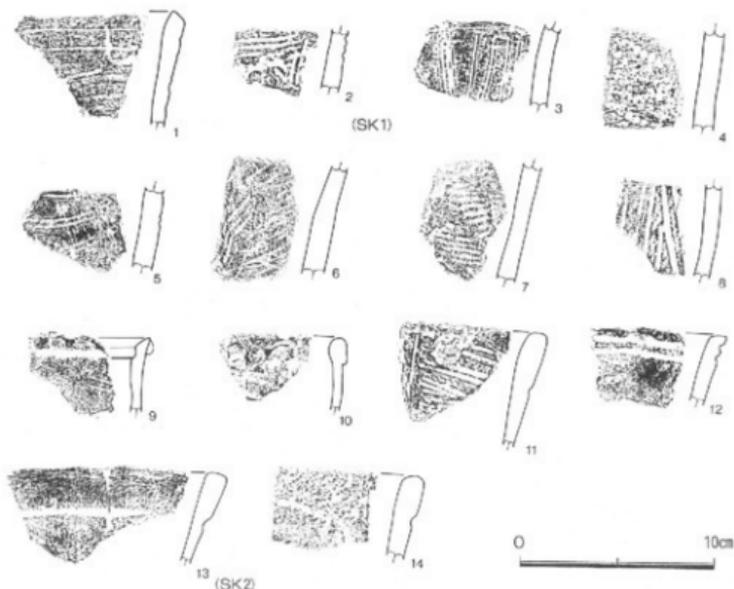
第6図 土坑(SK7・9)実測図(3) (1/6)

層暗褐色土(粘性高・粒子中細)、第2層黄褐色土(粘性高・粒子細)となっている。壁は緩く傾斜しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土から遺物の出土はなかった。

5号土坑(SK05) 1号土坑の西側1.2mに位置する不整楕円形土坑である。確認面での上端長軸1.3m、短軸0.72m、下端長軸1.08m、短軸0.62m、深さ0.05mを測る。覆土は第1層灰褐色土(粘性弱・粒子細)、第2層灰褐色土(粘性弱・粒子中細)となっている。なお土坑内西側に長軸0.4m、短軸0.24m、深さ0.11mの楕円形ピットが付設されている。また壁の立ち上がりはほぼ垂直で、底面はわずかに凹凸が認められる。覆土中より遺物の出土はなかった。

6号土坑(SK06) 4号土坑の南0.4m位置する不整楕円形土坑である。確認面での上端長軸0.78m、短軸0.43m、下端長軸0.66m、短軸0.38m、深さ0.24mを測る。壁は緩い傾斜をもち、底面は船底状を呈する。覆土中より遺物の検出はなかった。

7号土坑(SK07) 屋外炉址と思われる。西側突出緩斜面部に位置し、みんながわにもう一つ土坑が付設されている。確認面での上端長軸1.69m、短軸0.9m、下端長軸1.60m、短軸0.75m、深さ0.13mを測る。また付随する南側土坑には長軸0.37m、短軸0.31m、深さ0.60mの柱穴状ピットが穿られている。なお北側の覆土中には0.9×0.6mの範囲内に焼土の堆積が認められる。覆土は第1層灰褐色土(粘性弱・粒子粗)、第2層灰褐色土(粘性弱・粒子中細)、第3層赤褐色土(焼土ブロック・粘性弱・粒子粗)、第4層赤褐色土(焼土ブロッ



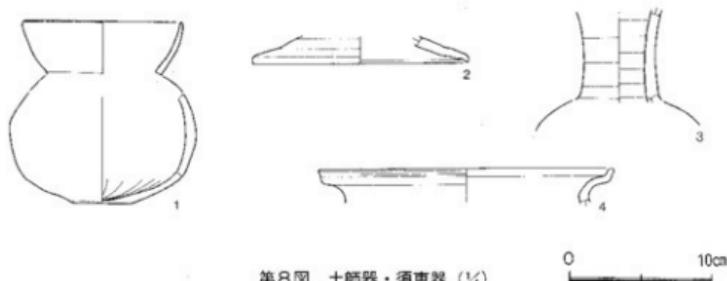
第7図 縄文土器 (1/4)

ク・粘性弱・粒子中細)となっている。壁の立ち上がりは緩傾斜で、床面は凹凸である。遺物の出土はないものの、縄文時代の所産と考えてよいであろう。

8号土坑 (SK08) 屋外炉址と思われる。5号土坑の南0.30mに位置する不整楕円形土坑である。確認面での上端長軸2.02m、短軸1.25m、下端長軸1.90m、短軸0.95m、深さ0.21mを測り、北端に長軸0.52m、短軸0.26mの楕円形を呈する柱穴状ビットが穿たれている。覆土は第1層灰褐色土(粘性弱・粒子細)、第2層灰褐色土(粘性弱・粒子中細)、第3層赤褐色土(焼土ブロック・粘性弱・粒子中細)、第4層赤褐色土(焼土ブロック・粘性弱・粒子粗)、第5層灰褐色土(粘性弱・粒子細)となっている。壁の立ち上がりは緩い傾斜を呈し、底面はほぼ平坦で、やや堅緻である。本土坑からの出土遺物は検出されなかったが、やはり縄文時代の所産である。

9号土坑 (SK09) 屋外炉址と思われる。5号土坑の北側2.86mに位置する楕円形土坑である。確認面での上端長軸1.56m、短軸0.92m、下端長軸1.42m、短軸0.73m、深さ0.08mを測る。覆土は焼土を含む黒褐色土で締まりにやや欠け、粒子は粗い。壁の立ち上がりは緩く外傾し、床面は平坦で軟弱である。覆土中からの遺物の出土はないものの、縄文時代の所産と考えられる。

(小川)



第8図 土師器・須恵器 (34)

2. 土器

本遺跡で出土した遺物はすべて土器で、いずれも小片に限られていた。検出された土器の総数は117点あり、その内訳は縄文土器25点、土師器82点、須恵器7点、陶磁器3点である。この中で縄文土器2点は土坑より出土し、土師器埴形土器1点は埋設谷頭で発見されたものである。それ以外は表土層除去時あるいは表採資料である。とくに南西斜面部に集中していた。また時期は、縄文土器が早・前・後・晩期であり、土師器、須恵器は5および9世紀に属する。

A. 縄文土器 (第7図1~14, PL 8)

早期の土器 (1) 口縁部が外削状を呈し、細沈線文が横位に施文される。この細沈線文は半截竹管状工具による平行沈線である。田戸下層式土器。

前期の土器 (2~7) 2・3は半截竹管状工具による平行沈線文を幾何学状に施文するもので、3は円形刺突文を加飾する。4は単筋斜縄文を施す。2~4は黒浜式土器で、いずれも胎土に繊維を含有する。なお2はSK01より出土。5は半截竹管状工具による肋骨文を表出。6・7は細かく密な斜縄文を施し、諸磯a式土器である。

後期の土器 (8~11) 8は堀之内1式で、集合沈線文が施されている。9~11は所謂紐線文系土器で、9は加曾利B2式、10は安行1式、11は安行2式土器である。

晩期の土器 (12~14) いずれの土器も表面の摩耗が著しく細かな観察が不可能である。12は口縁部に半截竹管状工具による平行線を横走させる。13は口縁部下に一条の沈線を施す。いずれも安行Ⅲa式土器。14は前浦式で、沈線による曲線区画文を施し、区画外に縄文施文する。

B. 土師器・須恵器 (第8図1~4)

1は口径11cmの埴形で、摩耗が激しく整形は不詳。時期は器形から判断して5世紀末であろう。2は須恵器蓋の小片、ロクロ成形による。3は須恵器長頸壺、ロクロ成形による。4は土師器・甕形土器の小片で、口唇部が短く立ち上がる。2~4は9世紀の所産と考える。(小川)

第三章 まとめ —赤松遺跡のセルトメント・パターン—

今回調査した赤松遺跡を通時的にみても古くは縄文時代早期中葉にはじまり、新しくは平安時代まで延々と継続され営まれている。しかし、いずれの時期も集落を形成するほどの規模をもたない。いま「遺跡」とは人間・人間集団が過去において展開した行動の痕跡をとどめる「場」とであると定義される。したがって、土坑だけあるいはわずかな遺物だけの出土でもりっぱな遺跡の概念の中に含まれるのである。そこでいま赤松遺跡の縄文時代に絞ってみたい。縄文時代の遺跡を概観する時、一つのシステム論として「セルトメント・パターン」とおして論じる方法論がある。かつて小林達雄氏はこれを6種類のパターンに分類している(小林1980)。この中で赤松遺跡はパターンDに相当しよう。パターンDとは「歩行に困難を覚えるほどかなり急勾配の斜面などに立地し、住居跡がない。ほかの遺構もほとんどないが、稀に正体不明のピットなどをもつ場合がある。土器はせいぜい数個体を限度とし、石器は稀である。また灰跡や焼土なども確認されない。これは火を焚かなかったということではないが、少なくともその痕跡を遺す程度の継続的な使用はなかった」とする。こうしたひとつの類型化された抽象的な概念をそのまま赤松遺跡に当てはめることは難しいが、少なくとも「常時的な拠点集落(ベースキャンプ)ではなく、一時的な露营地(キャンプ)である。」とすることができる。かつてアメリカの人類学者L. R. ビンフォードは、採集・狩猟民に二つの型があり、キャンプを移動させ、獲得した食糧をすぐ消費し、ほとんど貯蔵をもたないフォレンジー(Forager)型とベース・キャンプなどの生活拠点があり、そこから必要に応じて採集・狩猟に出かけ、生活拠点で食糧の貯蔵を行なうコレクター(collector)型に分類した(Binford 1980、佐々木1991)。この概念を当てはめると赤松遺跡は前者のフォレンジー型的な性格をもつ遺跡であるといえよう。しかし問題は赤松遺跡が一集団による独立した遺跡であるかどうかである。ここで北700mに位置する大麻貝塚との関連が指摘される。縄文後期(堀之内1式~加曽利B式期)の主贓貝塚でまさに後者のコレクター型の遺跡である。したがって、この大麻貝塚を生活の拠点として食糧獲得のためのキャンプ地を季節ごとあるいは採集食糧の目的ごとに派生させていたのである。この派生された一つの「場」が赤松遺跡なのである。ここは狩猟活動、漁猟活動のキャンプ地としてあるいは獲物の解体場であったのであろう。赤松遺跡とは大麻貝塚の生活領域圏から派生され、しかも大麻貝塚と有機的に結びついた単位遺跡群なのである。

(小川)

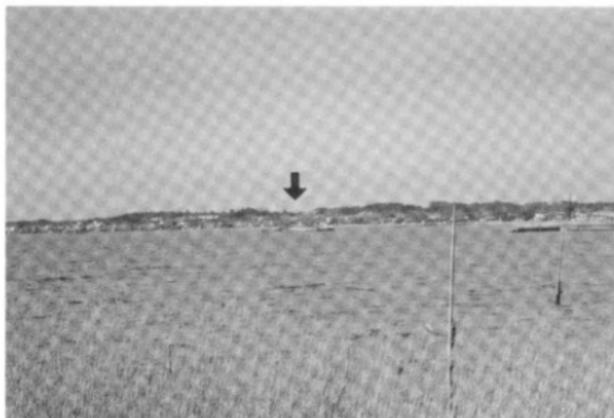
小林達雄1980「縄文時代の集落」『国史学』110・111号合併号

Binford, R.L. 1980 Willow Smoke and Dog's Tail: Hunter-Gatherer Settlement Systems and Archaeological Site Formation, *American Antiquity* 45-1

佐々木高明1991「日本史誕生」『日本の歴史①』集英社

圖 版

遺跡遠景(南より)



遺跡近景(西より)



遺跡近景(西より)





調査区全景(北から)

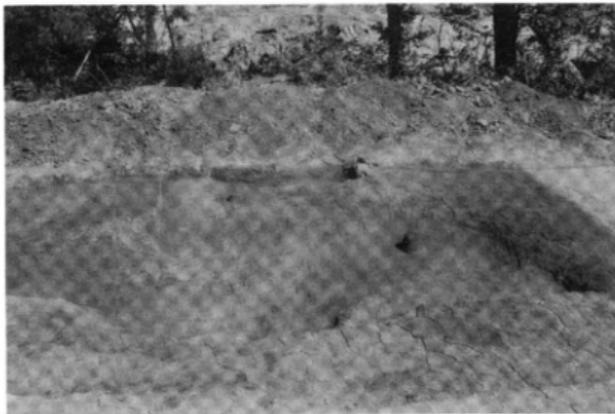


調査区全景(北西から)



調査区全景(西から)

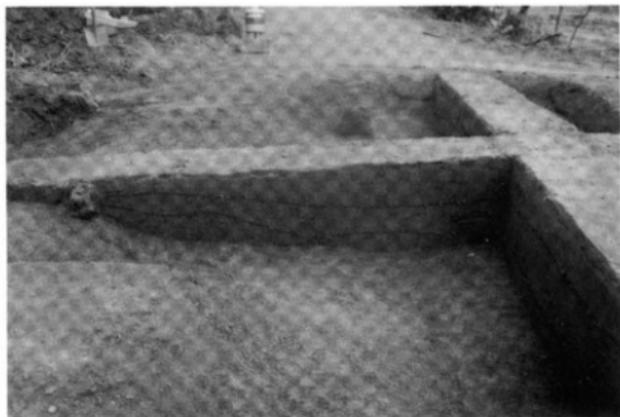
SK 1 全景

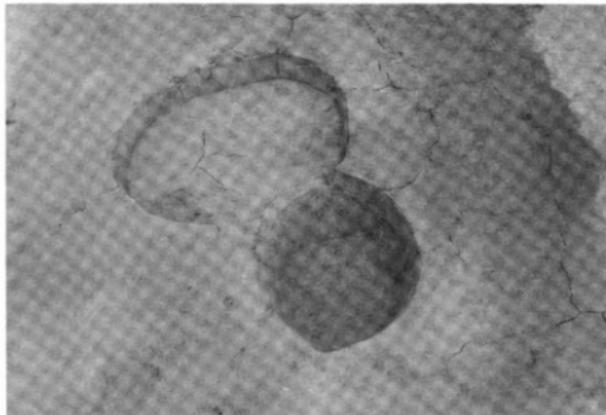


SK 1 土層

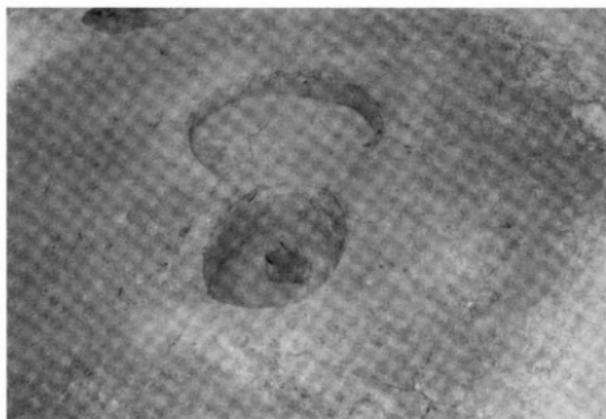


SK 土層





SK 2・3 全景

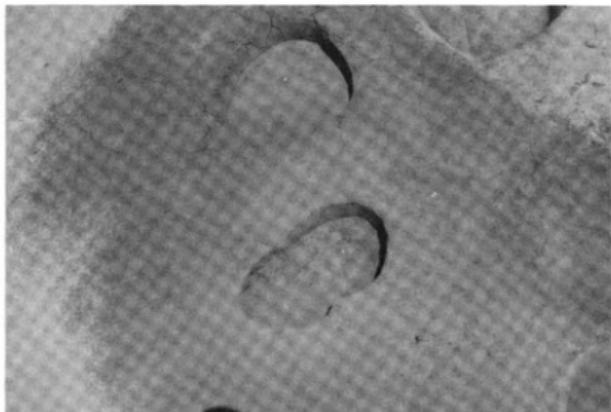


SK 2・3 全景

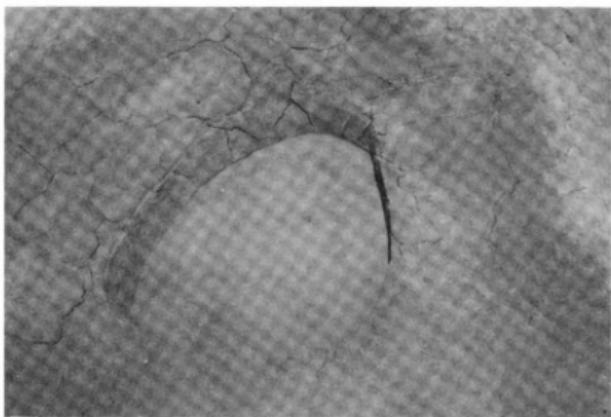


SK 2 遺物出土状況

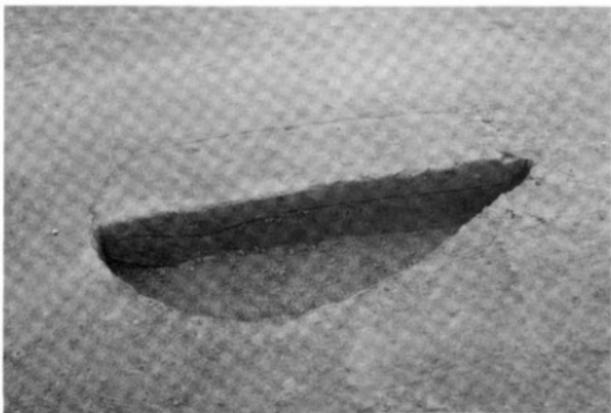
PL 5



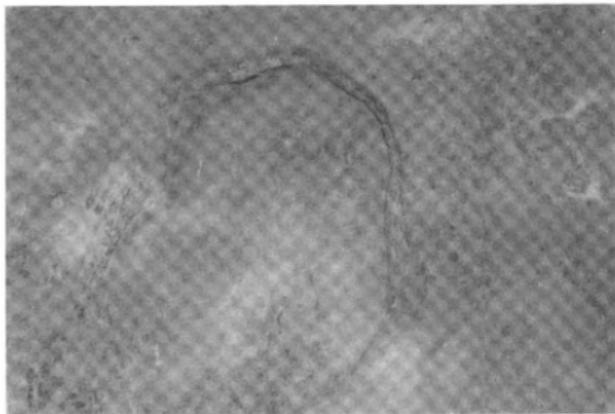
SK 4・6 全景



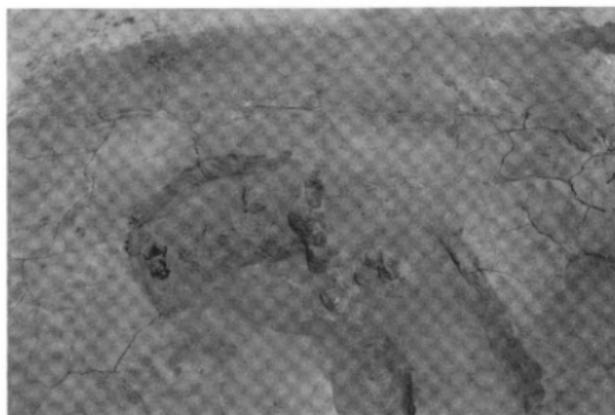
SK 4 全景



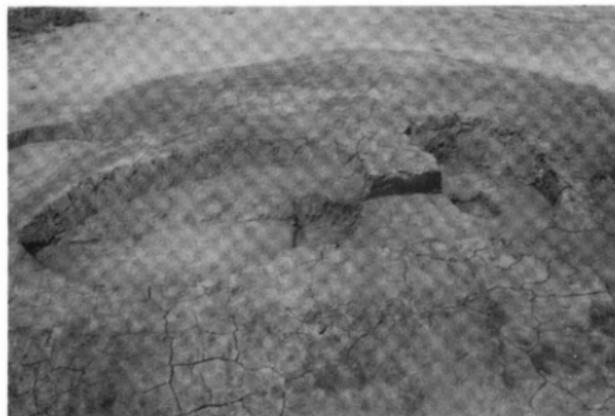
SK 4 土層



SK 5 全景



SK 7 全景

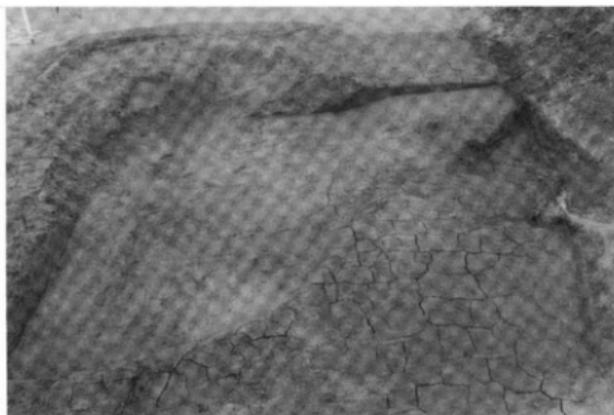


SK 8 全景

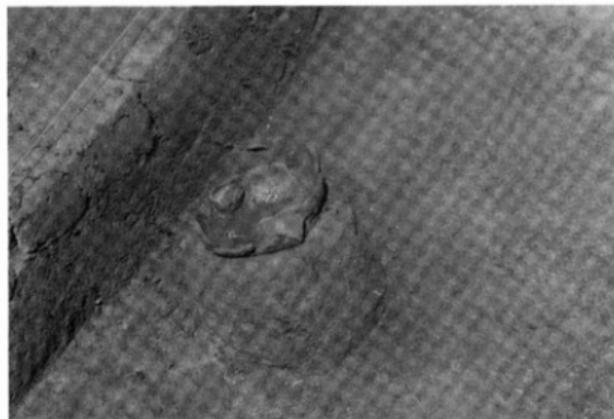
調査区南端部

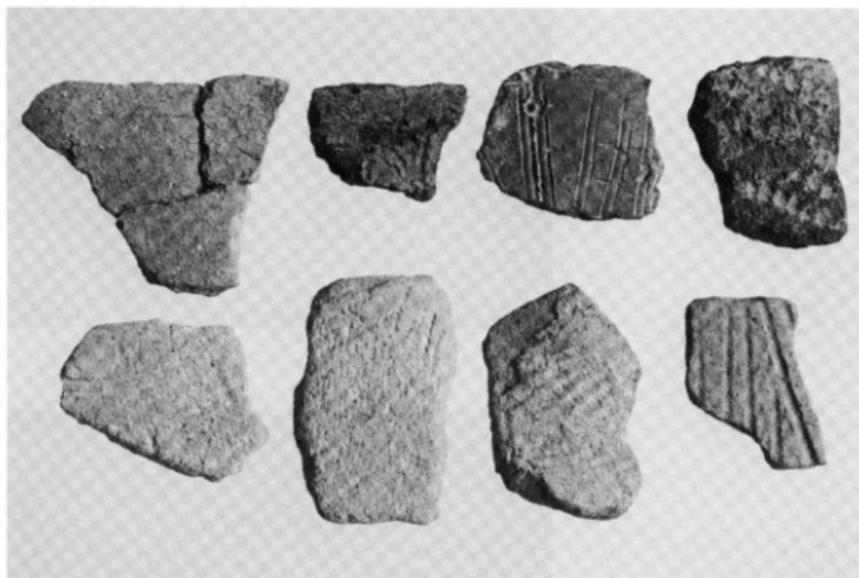


調査区南自然埋没谷

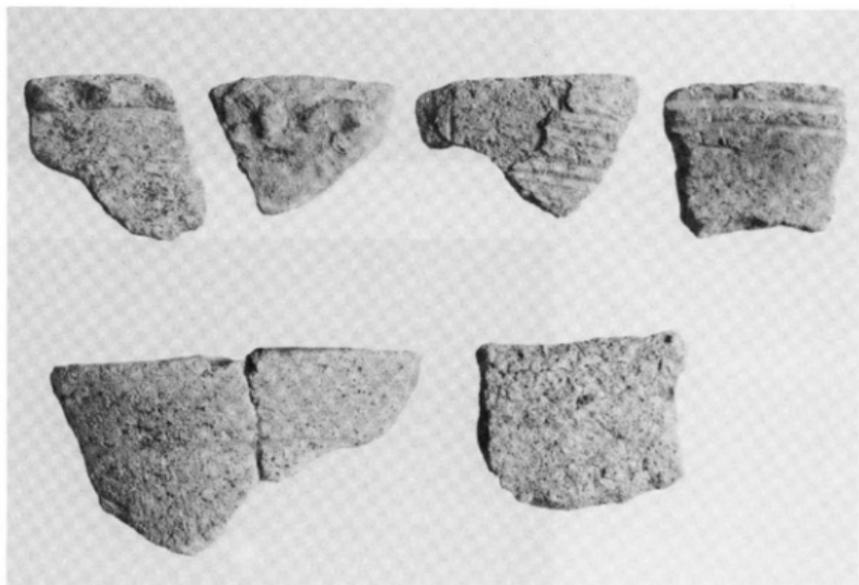


南自然埋没谷
遺物出土状況





出土縄文土器(1)



出土縄文土器(2)

茨木県行方郡麻生町
赤松遺跡発掘調査報告書

印刷 平成5年3月15日

発行 平成5年3月25日

発行 麻生町教育委員会

編集 赤松遺跡発掘調査会

日本考古学研究所

印刷 塚本プロセス

〒285 千葉県佐倉市王子台6-5-12

電話 043-487-0839
